
一線

からたちみかん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一線

【Nコード】

N2166E

【作者名】

からたちみかん

【あらすじ】

幼い頃から内に秘めていたのが狂気だったのか？愛しい人を目の前に繰り広げられる『私』の中の狂気と愛しさを抱えて。

花見デートの待ち合わせ前に私は、独り喫茶店に入る。いつものように携帯電話用のキーボードを取り出して文章を書き綴る。

ああ、この病的なまでの想いは一体どうしたら消化出来るものなのだろうか？

この中に脈々と疼く。

幼い頃から人の死を考えるたびに私の中に蔓延っているのは醜いだけの想い。病的なまでに広がって妄想だけではすまないのではないかという恐怖に慄いた。

人を殺してみたいという想いは悪なのか、気が触れた妄想なのか？ 誰でも抱いている思いなのか。それとも自分だけなのか？

猟奇的と言われる犯罪が起きるたびにテレビで偽善者が吐き出す言葉。

『理解できません』

本当にそうなのか？ 誰しも一度くらいは人を殺したいほど憎んだことがあるだろう？

ナイフを持って人を殺し。首を締めて殺す。はたまた猛毒を以て人を殺すのか。そんな妄想を抱いたことはないのだろうか？

テレビに映る犯罪者と私たちで何が違う？

一線を越えたかどうかそれだけの違いだ。

「あの、すみません。ちょっといいですか？」

声に驚き私は顔を上げた。

「それって、パソコンではなくて携帯電話についているものですか？」

隣に座っていた女性が興味深そうに携帯電話用のキーボードを覗き込んでいた。

またか、と、思う。携帯電話用のキーボードを使っていて何度同じことを聞かれたことか。確かに珍しいものなのかもしれない。

「今はあまり見かけないですけど何年か前に買ったものですよ」

差し障りない言葉を選んで私は笑顔で受け答える。こんな病的な文章を打ち込んでいるときに何気なく問われると奇妙な罪悪感が沸いてくる。

私は微笑みながら人を殺したい衝動に悶えているのですよ、と。

呟いた心の声は私しか知らない。

私は笑いながら人を殺すことを、死んだ人間がどこにいくのかを考えている。

「どうもありがとうございました」

「いえ」

微笑んで席を立ち去ってゆく女性の後ろ姿を見送って私は打ち込んでいた文章を削除した。こんな垂れ流しの文章はいらない。

と、にわかに携帯電話がメールを受信して光る。メールはあなたからのものだった。

『今、仕事終わったよ（＾Ｏ＾）どこにいるの？』

多くの人が行き交う駅の一角で彼と待ち合わせする。

喫茶店で待っていてもよかったけれど早く彼に会いたくて駅まで行った。

遠くから彼が早足に近づいてくる。

「ごめん待った？」

「うっん」

私は首を横に振って答えた。見慣れない彼のスーツ姿がくすぐったい。彼は少し照れたように笑っていた。

「何か別人みたい」

「そう？」

「カッコイイ」

「いつもはかつこよくないの？」

「いつも以上にカッコイイよ」

つい最近、知り合いを通じて付き合うようになった彼は私より年下だった。笑顔にあどけなさの残る彼のスーッ姿。

いつもは弟のように思っている彼がひどく大人びて見えた。

どちらからともなく手を繋いで私たちは歩き出す。駅を出て裏の大通りを歩いた。

すっかりと日が暮れた夜道は春とはいえ肌寒い。途中立ち寄ったコンビニでお酒と食べ物を買った。

花見をしたいと言ったのは彼だ。けれども仕事の都合で時間が取れないのも彼で。ようやく時間が出来たのは桜の花も散りはじめた頃になってからだ。しかも仕事帰りしか時間が取れないということで、駅近くの公園で花見をすることにした。

公園の桜は薄紅色に色づき花びらがヒラヒラと舞っている。しかし美しい景色とは裏腹に喧しい声が響いている。

食い散らかし飲み散らかし、あとに残るのは悪臭を漂わせたゴミばかり。辟易としながらも私は顔に出さず彼を見上げた。

予想通りの景色だ。

「すごい人だね」

「仕方ないよ。花見シーズンだから」

「どこか空いてないかな？」

座る場所を探して彼と公園を歩く。

あちらこちらに敷き詰められたブルーシート。私の中で再びどうしようもない考えが過っていた。

ブルーシートの裏に隠された死体は一体、誰が処理しているのだろう。死体はドコに消えたのだろうか、と。

毎日ニュースを見れば嫌でも交通事故や火事や様々なことで人は死んでいる。ひしゃげた車が、こびりついた血が映っても死体が力

メラの目に触れることはない。

しかし誰が死んで誰かが死体を処理しているのは確かなことだ。死んだ人間が一人で家に帰れるわけがないのだから。

警察官が処理しているなどとそんなわかりきったことじゃない。心理が知りたかった。

「どうしたの？ ぼんやりとして」

声にはつとして私は彼を見上げた。

「何でもない」

私は慌てて首を降った。

「あそこのベンチ空いてない？」

誤魔化すようにずらした視線の先に空いたベンチを見つけた。あまりいい場所とは言い難かったけれど私たちはそこに陣取った。

花見というのは名目だけで二人でたわいのないことを話しながら過ごせばそれでよかった。残酷なまでにぬくもりを求める。

ふと見上げれば空には欠けた月が見えた。

「月がきれいだね」

「本当だ」

彼も同じように月を見上げた。その横顔を覗き込む。

ああ、今夜はやけに病的な妄想に駆られる。

『櫻の樹の下には死体が埋まっている』

そう言ったのは若くして夭折した梶井基次郎だったか。

今も昔も変わらない。人々は花見とかこつけて騒ぎたいだけだ。

耳障りなまでに賑やかな声。

知っている？

問いかけて妄想せずにはいられない。桜の木の下には、ブルーシートの下には死体が埋まっている。

累々と屍が眠るその上では酒を呑み現実から逃げ出した。もっと、酔いしれればいい。この滑稽なる景色の中で病的なまでに思う存分

現実を忘れてしまえ。

そうして、私は？

愛しい人がいる。目の前に。私は微笑み彼に寄り添う。

「酔っちゃった」

「顔真っ赤だよ」

彼は私をそっと抱きしめる。優しいあなたを私はどうしたいの？

「ん、ふふふ」

そのウチに秘めたるは病にも似た狂気。

舞え、舞え、櫻の花弁。

風が吹いた。地下鉄の風はやけに生ぬるい。電車の到着を知らせるアナウンスが響いた。

花見の帰り、私たちは地下鉄のホームにいた。握りあっていた手。あなたは強く私の手を握りしめる。見上げれば優しいのにどこか寂しそうな顔をしているように見えた。

きっと私が心あらずに考え事をしているからに違いない。

それは罪悪感だったのか？

「手、冷たい」

「心が冷たい人は心が暖かいからだよ」

「自分で言う？」

「あたしほど優しい人いないでしょ？」

笑いながら私は彼を見上げる。嘘を吐き出す私の言葉。自分でも優しくないことはわかりきっているのに。

彼に対する愛情は嘘じゃない。

けれどもどうすることも出来ない闇がある。私は自分がこんな性格だから人のことも疑った。

この人も人を殺したい衝動に駆られるときがあるのだろうか？

地下鉄のホームに電車が滑り込んでくる。握っていた指に力が入る。この人の背中を押して殺してしまいたい衝動を押さえた。

愛する人を殺す妄想をするときほど甘美な罪はない。愛しているから殺したいのか。それとも知らずに憎んでいるのか。

愛した人を殺す妄想は病的なまでに私の中を支配する。

「ねえ」

「何？」

「来年も一緒に花見に行こうね」

私は微笑んで彼を見上げる。愛していると殺したいという衝動という矛盾を抱えながら。

「来年はもうちょっと遠出してみようか？」

彼は嬉しそうに答えた。

「うん」

私は頷く。どうか一線を越えてしまわないようにと祈りながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2166e/>

一線

2010年10月8日15時47分発行